
ねこの思い出2 「猫手傷をうける」

西宮尚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねこの思い出2「猫手傷をつける」

【Nコード】

N5742D

【作者名】

西宮尚

【あらすじ】

ねこの思い出18歳8ヶ月で逝ってしまったねことは、いろいろな思い出がある。その思い出の中でも一番強烈に残っているのが、「猫手傷事件」です。その思い出をつづります。

(前書き)

18歳8ヶ月で逝ってしまったたねこの思い出をつづります。
そのねこは、最高にかわいい容姿と最悪な性格をしていました。

ねこを実際に家猫にしたのは、その前に飼っていたミーちゃんが交通事故で亡くなったためだった。

ミーちゃんは、甘えん坊で人になつっこい猫だった。

そんな猫が突然いなくなってしまった焦燥感から、兄の家の外猫であつたねこを連れてきて飼うことにした。

ねこ1歳ぐらいの若い猫だった。

しかし、餌は人からもらうけれども、心は人のものにはならない野生つ気のある強い猫だ。

そんなねこをいきなり家に入れたのだから、ただですむ訳はない。

狭い場所から出てこない。無理やり出そうとすると容赦なく引つかれた。

背中をなでるだけでシャーっと威嚇。それでも背中をなでていると、また容赦なく引つかれた。

何が気に入らないのか、何もしなくても容赦なく引つかれた。

とにかく、人になつかなかった。

でも、私は、ねこと一緒に寝るが好きだ。

ねこも頑固なら、私も負けにくいぐらい頑固だった。

触られるのが嫌いなねこの両手両足を押さえて、顔でお腹のふかふかした毛をスリスリするぐらいは平気でやっていた。

だから、そんなねこを押さえつけて、力技で布団に入れた。

ねこはあらゆる手を使って、その災難から逃れようとする。

そんなことを、寝る前に何十分も戦うが、結局は、私が眠くなってしまうって負けてしまう日が続いた。

そして、その事件があつた日も、私の負け戦であつた。

私も眠いので、そのまま寝てしまった。

でも、今から思うと、もつとこのねこの性格を考えておけば、このようなことにはならなかったと思う…

何故、何もしていない時に引っかくのか？

そう。このねこは非常に恨みがましいのであった。

以前やられたことをすっかり根に持っていて、その復讐を行っていたのである！

ねこは、私が寝静まってから、1時間じっくり待ってから復讐に来た。

ツメを思い切り出して、ベッドの上にある私の頭の高さまで飛んできた！

そのツメは、私のこめかみに突き刺さった。

驚いて、飛び起きて、電気をつけたら、頭からポタポタと血が落ちた。

ねこは、ベッドの上でシャーシャーと威嚇している。

これはねこの喧嘩と同じだ。

ねこと同等に思われているのと、血が出ているので、これは、しつけをしておかないといけないと思った。

私がベットから出ると、ねこは逃げ出したが、なんとか部屋の隅に追い詰めることが出来た。

そこで、ねこに鉄拳を食らわせたのであるが、まだ寝ぼけていたので加減がわからなかった。

鉄拳の半分は、ねこの後ろの壁に当たってしまった。

それでもねこは、私を恐れてものすごい勢いで暗闇に逃げていった。

さて、私。

こめかみからは血が流れているし、右手の指の中3本は第二関節のところの皮がむけて血がにじんでいる…

とりあえず、両親を呼んだのであるが、カラオケに行っていて帰ってきていなかった。

仕方なく、自分で救急箱の所に行つて、止血して絆創膏をつけた。そして、いろいろと痛かったが、とりあえず寝ることにした。

次の日。私は会社に行つた。

朝、早めに起きられず、怪我の処置は昨夜のままだった。

会う人会う人に「なんで、こんなところを怪我してるの?」と尋ねられたので、私は正直に「ねこに引つかかれました。」と答えていた。

でも、その答えに納得しない人もいる。「ねこって名前の男にやられたんじゃないの?」という感じだった。

こめかみの絆創膏は、みんなに面白く思われるようなので、午後から会社にくるお医者さんに手当てしてもらつことにした。

「ねこにやられたのか」。むしろ乾かした方がいいよ。おーい赤チンぬつてやつて」

医者は看護婦さんに指示した。

看護婦さんは、手早く赤チンを棒に付いた脱脂綿につけた。

チヨン、チヨン、チヨン、チヨン。

こめかみに赤チンを塗られて、「プツ」と吹き出だすのを聞いた。

そして、看護婦さんは、「どうしまししょう…これ…」と、私に鏡を差し出した。

赤チンをぬつた部分は、長細い丸が4つ並んでいる。

この形は、まるつきり、ねこの肉球の形をしているのだ!

とりあえず、そのまま職場に帰つて「男にやられたんじゃない」なんて言っていた人たちに、「ほらほら、本当にねこにやられたんですよ!」と見せた。

しかし、この赤チンがねこの手形にみえる傷のうわさで、他の職場からも見学に来る人まで出てしまった…

これが、「猫手傷」事件の全容である。
私は、この事件以来、どのような怪我をしても「ねこにやられたの？」と聞かれるようになった。
女としては何か失ったような感じがする…

その後の私とねこの仲というと…
私は、今までと変わらず羽交い絞めにしてねこにスリスリしたし、一緒に寝るのもあきらめなかった。
ねこは、やはり気が強かったが、私をひっかく頻度は減った。その分、噛む頻度は増えたけれど…
そんなねこも、一ヶ月もすると、人がそばにいることにも、撫でられることにも慣れた。
すっかり飼い猫らしくなってしまうと、一緒に寝ようとするとしぶしぶ一緒に寝てくれて、私が寝付くとベットを出て行くという、本当に飼い猫らしい芸当を身につけてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5742d/>

ねこの思い出2「猫手傷をうける」

2010年10月28日08時31分発行